

第三の眼

岩堀恵祐

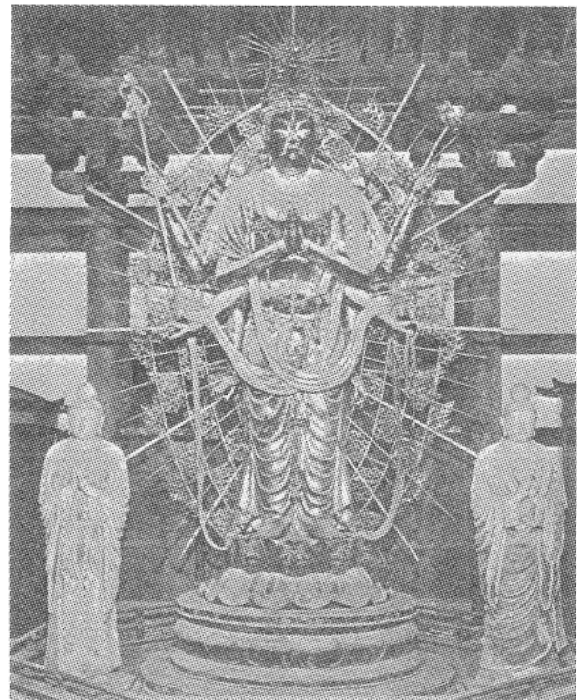
「仏像とは彫刻ではなく、一挙にただ仏である。」
(亀井勝一郎)

東大寺大仏殿の前を横切ってゆるやかな山路を東に向かって石段を上ると、そこにあるのが法華堂、俗にいう三月堂である。この堂は現存する東大寺の一堂とし、また奈良市内でも最古の木造建築物であり、元来は双堂の配置であったが、天平創建の寄棟造の本堂に鎌倉時代になって母屋造の礼堂が接続されたために、つぎはぎ細工のように見えて、しかも調和を保っている奇妙な建物である。

内陣に入ると、その空間の広さにまず驚かされる。大仏殿の聳え立った大きさが印象的だっただけに、この小さな堂の内部空間は、私に一種の意外性を感じさせてくれたのかもしれない。堂内はまことに薄暗い。西方からの光だけがわずかに照らしているだけである。そこには本尊を始め多数の天平仏が立ちならび、それらが一度に眼の中に飛び込んでくる様子は仏像のもつ尊厳さよりもむしろ威圧感すら感じさせる。こんな感動が、大仏殿の多くの拝観者の喧騒に疲れた私の頭をひやしてくれた。これらの仏像の中でひとときわ私の心を捉えたのが本尊の不空羂索観音であった。

不空羂索観音——いかにも 厳しい名前である。慈悲の羂索(羂とは網、索とは繩の意味)をもって衆生を導き、悟りの彼岸に送るといわれている菩薩だそうだ。脱乾漆の3.63メートル大作で、額にたての眼(通常第三の眼と呼ばれている)がある三目の像で天平随一の傑作といわれている仏像である。

私はこの仏像を拝して、無上の悟りを求め、一切衆生の教化に努めるといった菩薩本来のもつ意味を疑いたくなくなった。飛鳥仏にみられる微



笑、白鳳期にみられるやさしさなど微塵もない面持ちには沈痛な悲壯感すら感じさせる。まさに受難の相貌とも言うべきであろうか。そして両脇にいる日光・月光菩薩に比べてこの仏像の合掌はあまりにも力強い。この堅く合わされた両手には、一心の願がこめられている。いったい何を念じているのであろうか。

俺の生活・俺の人生を
ふりかえてみて

どこかに嘘があったのだろうか。
社会なんてすべて嘘につつまれた
虚無の世界なのだろうか。

人間が誕生した時、その時から
既に嘘が始まったのだろうか。

仏様、俺自身が嘘なのでしょうか？

こんな事を考えながら第三の眼をみつめていたら、不思議と最初に感じた威圧感がなくなった。まるでヘビににらまれたカエルのように

私はただ第三の眼だけを見つめていた。——恐ろしい眼である——東大寺戒壇院の広目天の眼も恐ろしいと感じたが、両者には何か本質的に異なる点があると思う。第一に、この仏像が第三の眼という形をしていることである。作者の意図は明確ではないが、このような形をとらなければならない時代背景があったのかもしれない。第二には、広目天像の眼はあくまで主体は仏像であって蔽しさをたたえながら私達を見透している。つまり仏像の絶対性の中にあっては私達衆生は無力に等しいと眼が（すなわち仏像が）私達に問いかけているのである。私はこれを「絶対の眼」と称したい。これに対して第三の眼は、それほど蔽しさをたたえていない。む

しろその眼は純粹に私達の心をうつし出してくれるのである。つまり各自の迷いを第三の眼を通して各自にわからせてくれるという「反省の眼」なのである。だから第三の眼を拝する人によって色々の意味に解釈されるのである。私はこの二体が、いやこのような眼が天平時代盛期に造られたということに、命を傾けて念じた古人の魂なるものを感じてならない。

私は、この恐ろしい第三の眼が人間をうつし出す真実の鏡であると信じている。そして現代人の忘れ去った「危機感」というものをこの第三の眼はうつし出しているのではないだろうか？